

# ヘミングウェイ文学におけるヒロインのプロトタイプ

## ——レディ・ダフ・トワイズデンをめぐって(1)——

日 下 洋 右

### The Prototypes of Heroines in Hemingway's Literature: On Lady Duff Twysden (1)

Yosuke KUSAKA

『日はまた昇る』(*The Sun Also Rises*, 1926)に登場するほとんどあらゆる人物は、実在の人物をモデルとして描かれているので、その人物が誰であるのかを容易に突きとめることができたといわれる。『日はまた昇る』が出版された当時、パリ在住の読者にとってこの小説を読む楽しみの多くは、登場人物たちのモデルを詮索することであったといわれたのも首肯できよう。

事実、この小説の最初の草稿は『フィエスタ』(*Fiesta*)と呼ばれ、その中では1925年の夏に7日間をわたってサン・フェルミンの祝祭を見物するために、パリのモンパルナスからスペインのパンブローナへ旅をした実在の人物の名前がそのまま用いられていた。ヘミングウェイ夫妻、ニーニョ・デ・ラ・パルマ(Niño de la Palma)、<sup>1</sup> ハロルド・ローブ(Harold Loeb)、レディ・ダフ・トワイズデン(Lady Duff Twysden)、<sup>2</sup> パット・ガスリー(Pat Guthrie)、ビル・スミス(Bill Smith)、<sup>3</sup> ドナルド・オグデン・スチュアート(Donald Ogden Stewart)<sup>4</sup> などの実在の人物が登場して『フィエスタ』は始まっていた。したがって、登場人物に関する限り、この段階ではヘミングウェイは文学的創造力をまだ完全に発酵させていなかったとみてよい。しかし、2, 3週間後、ヘミングウェイは冒頭の十数ページを手直しし、登場人物名を変更した。

パンブローナでヘミングウェイと戯れたレディ・ダフ・トワイズデンは、一時ダフ・アントニ(Duff Anthony)とされたが、最終的にはレディ・ブレット・アシュリー(Lady Brett Ashley)<sup>5</sup>に落ち着いた。ダフの従弟で許婚のパット・ガスリーは、マイク・キャンベル(Mike Campbell)に変えられた。ヘミングウェイの親友ビル・スミスとドナルド・オグデン・スチュアートは、融合されて最初ビル・グランディ(Bill Grundy)<sup>6</sup>とされ、それからビル・ゴートン(Bill Gorton)とされた。ヘミングウェイの友人兼恋敵のハロルド・ローブは、最初ジェラルド・コーン(Gerald Cohn)<sup>7</sup>と呼ばれていたが、最終的にはロバート・コーン(Robert Cohn)と変更された。ヘミングウェイは最初の草稿では「ヘム」(“Hem”)とされていたが、最終的には語り手で性的不能者のジェイク・バーンズ(Jake Barnes)と改められた。

ローブのガールフレンドであるキティ・キャネル(Kitty Cannell)は、フランセス・クリーン(Frances Clyne)に変えられた。キャネルはモンパルナスの人たちから広く好感を持たれ、賛美されていた人物であったにもかかわらず、『日はまた昇る』の中ではフランセス・クリーンとしてキャネル本人とは懸け離れた不幸なほど感情的な人物に変えられてしまった。キャネルはヘミングウェイの自己顕示欲、反ユダヤ的感情、<sup>8</sup> 日和見主義、彼女の友人フォード・マドックス・フォード(Ford Madox Ford)を軽視する態度などのため、ヘミングウェイが大嫌いであった。

さらに、キャネルはヘミングウェイがハドリーに対する思いやりに欠けていることを嘆かわしく思っていた。ヘミングウェイはハドリーをパリの薄汚い地区にある陰気なアパートに住まわせていたことに加え、彼女に着古した服を着せて、貧しい生活をさせていたからである。キャネルは数年

間『ニューヨーク・タイムズ』(*The New York Times*) 紙パリ版のファッション担当の編集人をつとめることになるだけあって服飾の流行には敏感であったので、当然の反応として彼女はハドリーをショッピングに連れだし、イヤリングなどの装身具の小物を彼女に贈った。チャンネルはこの親切な行為を楽しんでいるふうであったが、それがヘミングウェイの怒りを買った。

チャンネルの差し出がましい迷惑な行為に対するヘミングウェイの復讐は、『日はまた昇る』の中で彼女にまつわるエピソードを14ページにわたって取り上げて、彼女についてひどい扱い方をすることであった。このエピソードはマドリードで書かれたが、修正の最終段階では文章が凝縮され、徹底的に辛辣にされた。その結果、このエピソードでは、チャンネルの投影とされたフランセス・グリーンは、彼女と手を切ろうとするロバート・コーンの手法をジェイクの面前で皮肉たっぷり非難してコーンに恥をかかせるような、情け容赦のない執念深い人物に仕立てられた。『日はまた昇る』が出版されたとき、チャンネルはこの小説の中で無慈悲で嫉妬深い女性に描かれ、こき下ろされていることに衝撃を受け、憤懣やるかたないまま三日間寝込んでしまった。

その他、フォード・マドックス・フォードとオーストラリア出身の画家で彼の夫人でもあるステラ・ボウエン (Stella Bowen)<sup>9</sup> は、ヘンリー・ブラドックス(Henry Braddocks)とその夫人とされた。しかし、二人がブラドックス夫妻と変えられても、二人のモデルを突きとめることは簡単にできた。虚構の場合と同様、実生活でも二人はアコーディオン演奏付きのダンス・ホールを一週間に一晚使用して、そこへ友人たちをみな招待したからである。ヘミングウェイがフォードの出版していた『トランスアトランティック・レビュー』(*Transatlantic Review*) 誌の編集を手伝っていた当時、フォードを軽蔑していたように、虚構でも二人の主催するダンスパーティがジェイクに吐き気を催させ、二人が鈍感で愚かな外国在住者として風刺された。

ハロルド・スターズ (Harold Stearns)は、ハーヴェイ・ストーン (Harvey Stone) とされた。虚構の中でハーヴェイ・ストーンがジェイクから金を借りたりする場面や、ジェイクから日曜日に競馬に出かけたかどうかきかれたりする場面から、ストーンが誰であるかは容易に推測することができた。というのも、ヘミングウェイはスターズに現金を貸したり、彼の飲食代を肩代わりしたり、彼のタイプライターの質請けをしたりして、彼を助けたことが知られているからである。また、スターズはパリで数年間、『シカゴ・トリビューン』(*The Chicago Tribune*) 紙のパリ版のために競馬の予想屋をつとめていたからである。

人物名の変更について最も扱いが厄介な問題となり、結果的に大きな変更を受けたのはハドリーである。というのも、草稿段階の登場人物名の変更時に、既にハドリーは物語から完全に消し去られてしまっていたからである。史実によれば、ヘミングウェイとその仲間が1925年夏に再び企てた祝祭見物の旅行時にはハドリーも同行したので、ヘミングウェイはダフ・トワイズデンに対する愛の情熱を満たすことができなかつたのである。そのため、ハドリーを物語から排除することによって、ヘミングウェイは自己の分身であるジェイクとダフの分身であるブレットの間の情熱的な愛を物語の前面に出すことができたのである。ジェイクとブレットの虚構上の関係は、1925年7月にヘミングウェイがダフに魅了されたにもかかわらず、彼女に対する愛を達成できなかったことの投影であるとみなされよう。

しかし、都合の悪いハドリーの存在を排除してしまったので、史実のようにヘミングウェイとダフの恋愛を成就できなくするには、ヘミングウェイは自己の投影であるジェイクを性的不能な人物にせざるをえなかつたのである。また、ハドリーを原稿段階で削除したのは、この小説の自伝的性質を弱め、作者にできるだけ自由に創造させる余地を与えることができるよう配慮したためでもある。他方、ハドリーの削除は、不幸なことに一年後彼女とヘミングウェイとの間に起こる離別を疑いもなく予示していた。

ヘミングウェイとハドリーとの結婚生活では、二人は三度の危機に直面した。一度目は彼女がリオン駅で夫の原稿を盗まれたことであり、二度目は彼女が望まれなかった妊娠をしたことであり、三度目は夫がダフ・トワイズデンに夢中になって彼女と恋の戯れを演じたことであった。ヘミングウェイとハドリーはこのような危機を乗り越えたが、1927年1月に二人はついに離婚し、その年の5月にヘミングウェイはポーリン・プファイファー (Pauline Pfeiffer)<sup>10</sup> と再婚した。

『日はまた昇る』のほとんどあらゆる登場人物は、ヘミングウェイがパリで知り合った人びとの合成であったとする説もある。特に、ブレットにはヒロインの要素の他に、売春婦のイメージが付与されているといわれる。<sup>11</sup> ブレットのモデルとされたダフの華やかな行動、男たちを魅了する性質、金銭上寄生的な生き方などがブレットにも明らかに認められるからである。ブレットの売春婦としての一面は、ヘミングウェイがダフをアルコール中毒者、乱交者、色情狂と呼んで、ダフに売春婦のレッテルを張ったことと無縁ではない。

その最も顕著な例は、ダフが黒人と関係して不特定の男性とふしだらな関係を結ぶ彼女の傾向が強調されていることである。『日はまた昇る』の第7章には、ジェイク、ブレット、伯爵の三人がダンスの夕べに出かけるためモンマルトにあるゼリの店へ移動し、そこでジェイクとブレットがダンスをするシーンがある。

Finally we went up to Montmartre. Inside Zelli's it was crowded, smoky, and noisy. The music hit you as you went in. Brett and I danced. It was so crowded we could barely move. The nigger drummer waved at Brett. We were caught in the jam, dancing in one place in front of him.

“Hahre you?”

“Great.”

“Thaats good.”

He was all teeth and lips.

“He's a great friend of mine,” Brett said. “Damn good drummer.”<sup>12</sup>

ブレットの親友である黒人のドラマーが彼女に向かって手を振る動作は、ブレットの乱交を微妙に暗示しているようにみえる。事実、この身振りは1925年にダフ・トワイズデンが黒人のミュージシャンと関係したため、イギリスにいられなくなったという噂が広まった状況を作者が利用したことを示していると同時に、ダフの不身持ち性を暗示しようとしたことを示しているとみてよい。

ヘミングウェイがダフを売春婦と断じた理由の一部は、ヘミングウェイ自身の性に関する問題のせいであったかもしれない。しかし、それはそれよりもむしろパリの性に関する環境そのものが、街の売春婦と比較的上流社会の性的に解放された女性との間の区別をヘミングウェイに曖昧にさせたためであったように思われる。

それ以上に、ヘミングウェイがダフに売春婦のイメージを植え付けたのは、二人の間に実際に性的な関係がなかったことが、彼女を乱交者、色情狂、アルコール中毒者と呼び、売春婦として描く強い動機となったかもしれない。実際、ダフとダフを崇拜していた夫との関係に深く悩まされていたハドリーは、二人には不倫の関係を結ぶ可能性があったと思うが事実は分からないとしながらも、二人の間には不倫関係がなかったことを確信する、と何年も経って語っているからである。

1925年7月14日に、ヘミングウェイはハドリーを伴いカイエターノ・オルドニェス(Cayetano Ordoñez)を追って、パンプローナからマドリッドへ到着するとすぐに、パンプローナの聖フェルミン祭の期間中に起こったばかりの一連の出来事について書き始めた。ヘミングウェイはカイエター

ノ・オールドニェスをペドロ・ロメロ (Pedro Romero) として、彼を新しい小説のヒーローとすることに決めた。ヘミングウェイ夫妻は例年の大祝祭が執り行われるヴァレンシアへオールドニェスを追って7月24日に移動した。そのときまでには、ヘミングウェイは小説の冒頭の部分に不満を抱いたため、舞台をパリに移し、第一次大戦中に戦闘で負傷し、1920年に新聞記者としてパリに駐在していたジェイク・バーンズを新しい主人公とすることにした。しかし、バーンズは戦争で負傷して性的不能となり、魅惑的で快楽的なブレットを求めても、また彼女の欲求に応じようとしてもむなしい結果に終わることになる。

ヒロインは爵位のある奔放なイギリス人女性ブレット・アシュリーであった。ブレットの仲間は、放縦なアルコール中毒者のスコットランド人マイク・キャンベルであり、ブレットの惨めな崇拜者ロバート・コーンである。8月の初めに、ヘミングウェイ夫妻はオールドニェスの後を追って2、3日間マドリドへ再び戻り、それから海水浴のためサン・セバスティアンへ行き、最後にフランスとの国境を越えてアンデーへでた。その間ずっとヘミングウェイは2、3時間の睡眠時間を除いたすべての時間を費やして新小説を書き進めていた。8月12日までに新しい小説の原稿がノート2冊分となった。書き始めてからほぼ2か月後の9月21日に、ヘミングウェイはパリで最初の原稿を書き終えた。一週間後彼は新しい小説のタイトルを「日はまた昇る」とすることに決めた。

次の6か月間にゆっくりとした速度で、広範囲にわたって原稿に修正が加えられた。ヘミングウェイはオーストリアのシュルンスに滞在していたハドリーと合流した後の1926年3月末に原稿の修正を終えた。この6か月の間には、ヘミングウェイはダフに失望していたが、その代わりにポーリン・プファイファーへの恋が燃え上がっていた。1926年の3月にヘミングウェイ夫妻が保養地シュルンスで冬の休暇を過ごしてパリへ戻ったとき、夫妻にポーリン・プファイファーとヴァージニア (ジミー)・プファイファー (Virginia(jimmy) Pfeiffer)<sup>13</sup> 姉妹を紹介したのはキティ・キャネルであった。彼は26年の8月にハドリーと別居した後、パリのグラン＝ゾーギュスタン河岸のアパート内にあるジェラルド・マーフィ (Gerald Murphy)<sup>14</sup> の仕事場で『日はまた昇る』のゲラ刷りの手直しに従事した。この作品は26年10月にチャールズ・スクリブナーズ (Charles Scribner's Sons) 社から出版された。この小説は後に彼が捨てた妻と息子に献呈された。

『日はまた昇る』の中で描かれている主要な出来事も、実際に起こった一連の出来事にほぼ基づいている。この小説の中心的な出来事は、1924年の夏と25年の夏の二度にわたって、ヘミングウェイとその友人たちがスペインのパンプローナヘサン・フェルミンの祝祭見物に出かけたときの体験や出来事を合成したものだからである。24年にパンプローナへ出かけたときの人びとは、ヘミングウェイとその妻ハドリー、機知と元気が売りもののドナルド・オグデン・スチュアート、ヘミングウェイとアメリカのミシガンで男同士の友情を誓い合った1916年来の親友ビル・スミスの一行であった。24年の夏には、祝祭も闘牛もパンプローナへ向かう途中で立ち寄ったイラティ川のマス釣りもすばらしかったが、一行の間で育まれた友情はそれ以上にすばらしいものであった。

翌年にも同じメンバーで再びパンプローナへ出かける予定であったが、このときには前回と事情が異なった。というのも、ダフはヘミングウェイとその仲間たちがパンプローナへ祝祭見物に出かけるという情報をえたので、彼女もパット・ガスリーやハロルド・ローブと一緒に出かけたいとヘミングウェイに申し入れたからである。<sup>15</sup> ヘミングウェイはダフの申し入れに同意して、ダフとその許婚のガスリー、それにローブが新たに巡礼の一行に加わることになったのである。

1924年の春に、ヘミングウェイはフォード・マドックス・フォードを介してハロルド・ローブと知り合った。翌年彼はローブとそのガールフレンドのキャネルとよく会った。ローブはニューヨークの裕福なユダヤ人の家系の出身であり、プリンストン大学最初のユダヤ人学生であった。彼は『ブルーム』(Broom)という小雑誌の共同編集者であり、1925年にボニー・アンド・リヴェライト (Boni

and Liveright) 社から『ドゥーダブ』(Doodab)という作品を出版していた。

ヘミングウェイはローブに食事やワインをおごったり、彼とボクシングやテニスをしたり、反ユダヤ主義に対する非難からローブを護ったりした。一方、ローブはヘミングウェイの『われらの時代に』(In Our Time)を出版するのに力を貸した。彼のために助力したので、後に『日はまた昇る』の中で、ヘミングウェイがローブをロバート・コーンとして風刺した理由が彼には理解できなかった。<sup>16</sup> ローブを風刺的に描いた理由は、ローブが非常に美男子であったので、ヘミングウェイがそのことに嫉妬したためかもしれないし、ローブがテニスで競争心の旺盛なヘミングウェイを負かしたためかもしれない、とハドリーは語っている。しかし、ハドリーの推測した理由は表面的であり、後にローブの口から直接語られた理由はそれ以上に深刻である。事実、ハロルド・ローブがロバート・コーンとして風刺されたことの真相は、パンプローナの祝祭見物期間中にローブに起こった出来事と、その直前に密かに実行されたローブとダフの不倫旅行にたどられることになる。

1924年の夏の旅行と翌年の夏の旅行との間には、大きな相違点がいくつかみられた。それは旅行のメンバーが単にふえただけでなく、前年には起こらなかったハプニングがいくつか起こったことである。その一つは、ヘミングウェイの一行がパンプローナへ出かける直前、ダフがガスリーの留守中ローブとサン・ジャン・ド・リュズという北スペイン沿岸のリゾート地で、2週間ほどロマンティックな日々をちょうど過ごしたばかりであったことである。

ハロルド・ローブが初めてダフ・トワイズデンの存在に気づいたのは、ある静かな午後のカフェ・セレで、薄暗い部屋を明るくするようなダフのよく響く陽気な笑い声を耳にしてからであった。ローブは彼女にすっかり魅了されてしまったので、次の日の午後二人は誰にも気づかれそうにない辺鄙なカフェで会う約束をした。約束を果たしてひとときの逢瀬を楽しんだ後、ローブは彼女に二人で駆け落ちをするよう求め、翌日二人は北スペインへ向かう寝台列車に乗っていた。彼女にとって、厳ついが美しい顔立ちに加えて、堅実な高等教育を受けていたローブとの駆け落ちは、嫌気がさしていたイギリス貴族から逃れられたことが実感できた喜ぶべき逃避であった。

二人は海辺を散策したり、海水浴をしたり、カジノでギャンブルやダンスをしたりして数日間二人だけの楽しい時間を過ごした後、山の中の隠れ宿に投宿して夢のような至福の日々を過ごした。ローブは完全に彼女の虜となってしまった。あるとき彼女は紙ばさみに挟んだ自分の描いた絵をローブに見せた。彼は彼女の絵の才能に感銘を受け、彼女に絵を描くことを再開するよう勧めたが、彼女はただ笑うばかりであった。彼女はパットがイギリスからパリに戻るまでに帰らなければならないので、パリへ向かう夜汽車に乗る用意をするときに迫っていることをローブに思い出させた。

ダフが彼のもとを去ってしまったので、ローブはサン・ジャン・ド・リュズに一人寂しく滞在しなければならなかった。2、3日後ダフがローブのもとへ手紙をよこした。その手紙は数日後パンプローナで起こる不快な出来事を予告していたが、二人にはそのようなことを知る由もなかった。手紙にはローブがそばにいないため寂しく惨めなこと、二人の愛の幕間劇はすばらしい夢のようであったことなどが書かれていた。それ以上に注目すべき点は、ダフとパットがヘムやその友人たちと一緒にパンプローナへ旅行する予定であるという情報であった。もしローブがそこへ一緒に行きたくなければ、彼女も手を引くつもりなので知らせてほしいこと、ただ彼女としてはパンプローナへ行きたい気持ちがきわめて強いことが、ローブの身を案じながらつけ加えられていた。ローブはダフの提案に同意したが、彼女が彼に対してまだこのようなやさしさと愛情を抱いていてくれたことに慰めをえた。

しかし、ダフと深く関係したことによって、ローブを心底心配させたのは、ダフの相手パットのことではなく、これまで大切にしていたヘミングウェイとの友情の絆が切れてしまうかもしれないことであり、彼に間違いなく向けられるはずのヘミングウェイの怒りであった。しかし、6月21日

のローブに宛てたヘミングウェイの手紙は、二人の間に面倒なことが起こりそうにないことを感じさせる友好的な内容であった。それは6月25日にパリを出発し、聖フェルミンの祝祭見物に行く途中、スチュアート、スミス、そしてヘミングウェイ夫妻と一緒にブルゲーテへ1週間ほど立ち寄ってマス釣りをする予定であるので、ローブにも合流することを期待するというものであったからである。

ヘミングウェイが列車のチケットを購入したり、パンプローナのホテルの部屋を予約したりする世話をすべて引き受けた。ローブはヘミングウェイたちと一緒に過ごす時間を短縮しようと考えて、ブルゲーテへヘミングウェイたちとは同行しないが、サン・ジャン・ド・リュズですでにこちらに向かっているダフとパットを待って一緒にパンプローナへ直接向かうことにする、とヘミングウェイに電報を打って知らせた。ダフとパットの乗った列車の到着後、サン・ジャン・ド・リュズのホテルのバーで、ダフはローブに関する限り事態が以前と同じでないことを彼に説明した。ダフはパットを愛し、彼に束縛されていた。彼女はもはやローブに興味を惹かれなかった。一方、ヘミングウェイの多くの友人たちは彼がダフに夢中であり、彼女も明らかに彼に惹きつけられていたと思っていた。ただ、二人の関係が性的関係に発展したと思う人は誰もいなかったし、ハドリーも同意見であった。しかし、ローブの友人キティ・チャンネルはダフがヘミングウェイと性的関係を持ちたくなかったので、その口実として彼が妻に誠実であることを利用したのだと信じていた。

ダフがヘミングウェイと性的関係を持ちたくなかったというチャンネルの見方は、表面的な見方にすぎない。ヘミングウェイの中に残存していた生まれ故郷オーク・パークの道徳心とハドリーに対するダフの配慮とによって、彼とダフは恋人同士になることを抑えることができたとみるべきである。ダフの魅力の虜になるか、ピューリタンの道徳心によってそれを抑えるかの葛藤は、『日はまた昇る』の中で、ジェイクがプレットを愛しプレットも彼を愛しているにもかかわらず、彼女と性的関係を結ぶことがどうしてもできないことに投影されている。

25年の夏にパンプローナを訪れた旅行者たちの状況の悪化は、ヘミングウェイとその仲間たちの間の人間関係と友情の亀裂を予示していた。25年夏の聖フェルミン祭の時期のパンプローナの状況は、24年の夏のときとは著しく異なっていた。というのも、25年にはパンプローナを訪れた外国人観光客の数が増加したためか、闘牛の見やすい席のチケットが手に入りづらくなったことに加えて、ホテル代も1年前よりも著しく高騰したからである。

彼らが投宿したパンプローナのホテル・クインタナ<sup>17</sup>では、パットはダフをめぐって彼のライバルとなったヘミングウェイとローブの前ではむっつりとして不機嫌な態度を取っていた。ローブはダフの彼に対する冷淡な態度に屈辱を感じ意気消沈していた。そのような彼の姿を見かねた仲間が、ローブにパンプローナを去った方がよいと助言していた。それにもかかわらず、ローブが彼女に付きまわっていたのは、ダフを面倒な状況のままにして去ってしまうことができなかつたためであり、彼女を取り戻せるという淡い希望を抱いていたためであった。ハドリーは最初仲間が反目し合う状況に直面しても、快活で落ち着いた雰囲気を持っていたが、夫が妻の面前で臆面もなくダフに夢中になると、彼女は嫉妬と屈辱のため心を痛め、疲れたとか頭痛がするなどという口実を作って、自分の部屋へ閉じこもってしまうのが常であった。スミスとスチュアートはダフに対するヘミングウェイの無遠慮な行動に当惑して、そのようなことが起こらなかつた振りをしようとした。

ダフに強烈に惹きつけられて彼女を求めたヘミングウェイとその相手のダフはお揃いのベレー帽をかぶり、長いささやくような会話を交わしていた。ローブがまだ彼女に一抹の期待を抱いているかもしれないとダフは思ったので、彼女はパットが部屋から出ていっている間にローブの部屋へ行って、彼に対する情熱がなくなり、二人の関係が終わったことを彼にそっけなく伝えた。このときまでには、ヘミングウェイはダフとローブが二人だけで密かにロマンティックな休暇を過ごして

いたことについてすべて知っていた。ヘミングウェイはそのことをきいてローブに裏切られたと感じて彼を罵った、とローブはスミスからヘミングウェイの反応をきかされていた。仲間がローブにパンプローナを去った方がよいと忠告していたのは、ヘミングウェイのローブに対する怒りを避けるためでもあり、ヘミングウェイとローブが反目し合うのを案じたためでもあった。

このように、ローブは彼女が彼に対する興味を再び掻き立てる希望をすべて諦めかけていたとき、ダフがローブに夕食後静かに酒を飲む連中に加わってはどうかと勧めた。彼らはしばし一緒に楽しいひとときを過ごした。それから彼らはあるクラブで一晩中飲んで騒いで注目的になった。次の日の昼食時に、ダフは額と目の回りに黒いあざをつくって現れた。パットは昨夜彼女がローブと一緒にになり、消沈していた男を励ましたのだと思ったために彼女を殴って罰したのだ、とローブは推測することができた。<sup>18</sup> ローブがあざについて尋ねると、ヘミングウェイが二人の会話を遮って、彼女のあざは手摺りに倒れてぶつかってできたものだと言明した。この場面に直面して、パットは不機嫌で不快な面持ちをしていた。スミスは厳しい表情をしていた。ローブは怒りで煮えくり返ったが、仕返しをすることまでは考えなかった。

その日の午後の闘牛見物では、ローブが闘牛の残忍性に嫌悪感を催し、退屈したとヘミングウェイがきかされたことをきっかけにして、ダフの尻を追いかけてブルゲーテへ釣りに出かけた仲間たちを捨てたローブをその夜苛め始めた。この苛めにローブを嫌がっていたパットが加わり、酔った勢いで激しく攻撃すると、ヘミングウェイはパットの擁護にまわり、厳しい態度でローブを非難し軽蔑した。ローブはヘミングウェイの敵意に衝撃を受けた。侮辱されて憤慨したローブは、ついに怒って立ち上がり、ヘミングウェイに殴り合いを挑んで外にでるようにと叫んだ。二人は外へ出て、入り口から少し離れた暗闇の中で歩みをとめた。ローブはヘミングウェイが彼よりも40ポンドも体重が重いので、ノックアウトされるのではないかと内心怯えた。ローブはこれまで築き上げてきた大切な二人の友情がこれで終るのかと思うと惨めな気持ちになった。ローブはジャケットを脱ぎ、角縁のメガネを注意深くはずしてジャケットのポケットの一つに入れ、そのジャケットを置く安全な場所を探し回った。しかし、突然ヘミングウェイが笑顔を見せて、ローブのメガネを持つよう申し出た。<sup>19</sup> これで二人の間の緊張の糸が切れて、ローブは最悪の事態が免れたことを知った。事実、二人の口から相手を殴りたくないという言葉が発せられた。こうして、二人の和解が成立したのである。二人は一緒に歩いてカフェへ戻った。翌朝（7月13日朝）ローブはホテルの彼のボックスにヘミングウェイのメモが入っているのを見つけた。<sup>20</sup> その短信はローブに与えた昨夜の不当な仕打ちに対する謝罪の手紙であった。

このときのエピソードは、1年後『日はまた昇る』の中で脚色されて再現されている。パンプローナのカフェ・スイゾでプレットの居場所を教えるよう迫るコーンに、ジェイクが意地悪く教えようとしないために喧嘩となり、ジェイクはコーンにノックアウトされる。その夜ジェイクがホテルに戻って、明かりのついていないコーンの部屋に入ると、彼はコーンが暗闇の中でうつ伏せになって横たわり、悔恨の情に打ちひしがれて、ベッドに顔をつけたまま声を立てずに泣いている姿を見つける。<sup>21</sup>

このように、『日はまた昇る』の中でハロルド・ローブは、ロバート・コーンとして残酷で意地の悪い扱われ方をされている。<sup>22</sup> ダフが相手かまわず情を交わす大酒飲みのふしだらな女とヘミングウェイからみなされたために、プレット・アシュリーとしてネガティブな人物に描かれたのと同様、ローブも女々しい男としてネガティブな人物に描かれたのは、彼がヘミングウェイの不興を買ったからである。ローブはその理由として三点あげている。一つは彼がヘミングウェイたちとパンプローナへ出かけた際、祝祭の宵祭りの行事として街なかに放たれた雄牛の一頭の頭上にもごとに乗って、ヘミングウェイのお気に入りの闘牛士から賞賛を勝ち得たため、彼の妬みを買ってしまったことで

ある。二つめはローブが闘牛の残忍性に嫌悪感を催して闘牛を批判し、ヘミングウェイの反感を買ったことである。三つめはローブがヘミングウェイを魅了して虜にしたダフと駆け落ちし、彼のピューリタニズムを踏みにじったことである。

ダフとパットは今回の祝祭見物の休暇を過ごすために十分な資金がないままやってきていたが、ヘミングウェイは二人を資金の面で援助することができなかった。というのも、その当時、ヘミングウェイ自身経済的に切りつめた生活をしていたうえに、すでにスチュアートから借金をしていたからである。結局スチュアートがダフとパットの経済的な危機を救った。ヘミングウェイ夫妻は闘牛士オールドニェスを追ってマドリードへ去り、スチュアートはリヴィエラへ向けて去った。ローブはレンタカーでビル、ダフ、そしてパットをサン・ジャン・ド・リュスまで連れて行った。

### 注

- 1 カイエターノ・オールドニェスの闘牛士名で、ペドロ・ロメロのモデルとされた。Jeffrey Meyers, *Hemingway: A Biography* (New York: Harper & Row, Publishers, 1985) 156.
- 2 ヘミングウェイをダフ・トワイズデンに紹介したのは、コンパクト・エディションの編集者兼発行者であったロバート・マコールモン (Robert McAlmon) (1896-1956) であった。彼の記憶によれば、ヘミングウェイは彼女の称号に感動したようだという。それから間もなくヘミングウェイは彼女に魅了されることになった。Leonard J. Leff, *Hemingway and His Conspirators* (Lanham, Maryland: Rowman & Littlefield Publishers, 1997) 21. James R. Mellow, *Hemingway: A Life Without Consequences* (Reading, Massachusetts: Addison-Wesley Publishing Company, 1994) 291.
- 3 ビル・スミス (1895-1972) は、8歳年上の兄ケンリー (Kenley) (1887-1969) と4歳年上の姉ケイティ (Katy) (1891-1947) と共に、ミズリー州のセントルイスに住む母方の叔母に当たるジョゼフ・ウィリアム・チャールズ (Joseph William Charles) 夫人のところに同居していた。彼らの父親はミズリー大学、後にチューレーン (Tulane) 大学でギリシア語、哲学、数学、物理学などを教えていた。彼らの母親は、1899年に肺結核のため亡くなっていた。母親が亡くなって以来、叔母は彼らの養母となり、ミシガン半島のホートン・ベイの農家を買収して、夏の間に健康を増進するための場所を彼らに提供した。そこはヘミングウェイの別荘から2マイル離れたところにあったので、当時ミズリー大学の学生であったビルとヘミングウェイは、1916年の夏と17年の夏に、相手の別荘のリンゴやマメのもぎ取り、ジャガイモ掘り、薪割りなどの雑用を引き受け合ったり、一緒に泳いだり、釣りをしたりして、男同士の友情を育んだ。ヘミングウェイの結婚式では、ビルは花婿の付添人をつとめた。姉のケイティはミズリー大学でヘミングウェイの二度目の妻ポーリン・プファイファーの級友であり、親友であった。姉はヘミングウェイの友人で作家のジョン・ドス・パソス (John Dos Passos) (1896-1970) と結婚したが、1947年に夫の運転する車で事故死した。
- 4 ドナルド・オグデン・スチュアート (1894-1980) アメリカのオハイオ州に生まれ、1916年にイエール大学を卒業した。機知に富んだユーモア作家。 *Parody Outline of History* (1921)、 *Mr. and Mrs. Haddock Abroad* (1925) などの作品がある。ポニー・アンド・リヴェライト社からヘミングウェイが『われらの時代に』 (*In Our Time*) を出版するのに奔走した。ヘミングウェイがスチュアートをパンプローナの祝祭見物へ誘ったのは、『われらの時代に』の出版が彼に負っていると思ったからである。Peter Griffin, *Less Than A Treason: Hemingway in Paris* (New York: Oxford University Press, 1990) 103.
- 5 ヘミングウェイは爵位を持つイギリス人女性に感銘を受ける傾向があったので、Brett Ashley の Ashley は1922年にビクトリア (Victoria) 女王の曾孫と結婚したエドウィン・アシュリー (Edwin Ashley) の姓を拝借したのである。Kenneth S. Lynn, *Hemingway* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1987) 289-90.

- 6 編集作業に不注意なところがあったため、『日はまた昇る』の出版された版にはビル・ゴートンがビル・グランディとされていたときの痕跡が一箇所残っていた。Mellow 304.
- 7 ジェラルド・コーンとされたのは、ジェラルド・マーフィ (Gerald Murphy) をヘミングウェイがやや嫌悪していたことと、ローブに対するヘミングウェイの悪感情とを巧妙に結びつけた結果であった。Mellow 304.
- 8 ヘミングウェイは反ユダヤ主義の環境で育ったので、彼には反ユダヤの感情があったのではないかという見方がある。しかし、ヘミングウェイの友人でアメリカの詩人アーチボルド・マクリース (Archibald Macleish) (1892-1982) も『エスクワイア』 (*Esquire*) 誌の編集主幹アーノルド・ギングリッチ (Arnold Gingrich) (1903-72) も、ヘミングウェイの反ユダヤ主義はきわめて軽いものであり、当時の風潮から出ていなかったと語っている。Denis Brian, *The True Gen: In Intimate Portrait of Hemingway by Those Who Knew Him* (New York: Grove Press, 1988) 58.
- 9 1924年1月にヘミングウェイは、アメリカの詩人エズラ・パウンド (Ezra Pound) (1885-1972) からフォード・マドックス・フォード (1873-1939) を紹介された。フォードは40歳を過ぎてから第一次世界大戦に志願し、1916年の夏にひどいガス攻撃を受けるという悲惨な経験をした。フォードは『グッド・ソルジャー』 (*The Good Soldier*, 1915) などを書いた小説家であり、『イングリッシュ・レビュー』 (*English Review*) 誌や『トランスアトランティック・レビュー』 (*Transatlantic Review*) 誌など雑誌のすぐれた編集者であった。ヘミングウェイは『トランスアトランティック・レビュー』誌のアシスタント・エディターとなったが、フォードの編集方針も手法も気にいらなかった。フォードはヘミングウェイの初期の短篇「インディアン集落」 (“Indian Camp”)、「医師とその妻」 (“The Doctor and the Doctor’s Wife”)、「涯しない雪」 (“Cross Country Snow”) と記事を数点『トランスアトランティック・レビュー』誌に掲載した。

『日はまた昇る』の中で、フォードとその夫人の主催するダンスパーティがジェイクに吐き気を催させ、二人が鈍感で愚かな国外在住者として風刺されていたにもかかわらず、フォードにはそれを気にかけている様子が一向にみられなかった。それどころか、フォードはヘミングウェイの散文とその才能を高く評価し、彼をすぐれた作家として位置づけた。Meyers 77, 129. Mellow 305.

- 10 ポーリン・プファイファーは1895年7月22日にアイオワ州パーカーズバーグで生まれた。1913年にドラッグストアを営んでいた父親とその家族は、アーカンソー州ピゴットに移った。ポーリンの父親はミズリー州でドラッグストアのチェーン店を展開していた。また、父親はアーカンソー州北部に約6万エーカーの森林地を買い取って開墾し、小作人を使用して小麦、トウモロコシ、綿花、クローヴァー、大豆などを作り大きな収益をあげていた。父親はアーカンソー州で最も裕福な地主の一人となった。ポーリンのお気に入りであった父親の弟ガス・プファイファー (Gas Pfeiffer) も、薬剤、塗布剤、そして化粧品各会社を所有する大富豪であった。

ポーリンはミズリー大学でジャーナリズムを専攻し、1918年に卒業して『クリーヴランド・スター』 (*The Cleveland Star*) 紙の記者、『ニューヨーク・ディリー・テレグラフ』 (*The New York Daily Telegraph*) 紙の記者、『ヴァニティ・フェア』 (*Vanity Fair*) 誌のファッション担当記者をつとめた。ポーリンは1920年代初期に妹と一緒にパリへ渡り、パリでは『ヴォーグ』 (*Vogue*) 誌パリ版の編集長のアシスタントをつとめた。ポーリンはロスアンジェルスセント・ヴィンセント病院へ入院して2、3時間後に腎臓にできた腫瘍がもとで1951年に56歳で亡くなった [Carlos Baker, *Ernest Hemingway: A Life Story* (New York: Charles Scribner’s Sons, 1969) 496]。

- 11 その当時フランスでは結核が売春婦の命取りとなる主要な疾患であったといわれていたが、ダフもその時代の売春婦に共通の病気である結核で亡くなったことは、ダフにつきまとう売春婦のイメージを強めることになろう。J. Gerald Kennedy and Jackson R. Bryer, *French Connections: Hemingway and Fitzgerald* (London: Macmillan, 1998) 88.
- 12 Ernest Hemingway, *The Sun Also Rises* (New York: Charles Scribner’s Sons, 1926) 62.
- 13 ヴァージニア (ジミー)・プファイファー (1902-73) ポーリン・プファイファーの妹。聡明で機知に溢れた人物。ヘミングウェイはキティ・キャネルからプファイファー姉妹を初めて紹介されたとき、姉よりも妹に特に惹かれたといわれる。ヘミングウェイは妹をレスビアンとみていた。Meyers

173. Mellow 293-94. Baker 142.
- 14 ジェラルド・マーフィ (1888-1964) は、イエール大学出身で建築学から絵に転じた裕福なアメリカ人であった。彼は1916年に結婚し、1921年に妻を伴ってパリへ渡り、パリのグラン＝ゾーギュスタン河岸にアパートを借りて生活を始めたが、たいていはリヴィエラ海岸のアンティープ岬にある優雅な別荘ヴィラ・アメリカで過ごした。Baker 158.
- 15 ヘミングウェイがダブとパットをパンブローナへの旅行に加わるよう招待したという説もある。Lynn 292.
- 16 『日はまた昇る』が出版された後、ロープが拳銃をもってヘミングウェイに仕返しをしようとしているという噂が流れたが、ロープは後にそれを否定した。その噂の出所はヘミングウェイ自身であったからである。Meyers 158-59. Brian 58.
- 17 『日はまた昇る』に登場するホテルの主人モントーヤ (Montoya) は、ホテル・クインタナの主人ジュアニート・クインタナ (Juanito Quintana) がモデルである。Mellow 305.
- 18 ロープに申し訳ないと感じたためかその他の理由からか、ダブは金曜日の夜に1時間かそこら二人だけでホテルから出かけたことが、彼を慰めて励ましたとパットから誤解され、罰として拳で殴られたのだとする見方もある。Lynn 293-94.
- 19 喧嘩の途中で癡癪を起こし、それから突然平静を取り戻すパターンは、ヘミングウェイの典型的な行動様式であった。同じパターンは1927年10月のアーサー・モス (Arthur Moss) や1937年8月のマックス・イーストマン (Max Eastman) との喧嘩の際にも生じた。Meyers 158.
- 20 ロープのホテルの接客係がヘミングウェイから預かった手紙を彼に渡したという説もある (Lynn 295)。ヘミングウェイが屈辱的な謝罪の手紙を書くのはきわめて珍しいことだったので、ハドリーに促されて書いたとする見方もある (Meyers 158)。
- 21 Hemingway, *The Sun Also Rises* 190-91, 193-94.
- 22 マルカム・カウリー (Malcolm Cowley) (1898-1989) によれば、ハロルド・ロープは『日はまた昇る』の中で女々しい男として描かれて、意地の悪い扱われ方をされたことに長い間怒り傷つけられたと語っていたという (Brian 59)。ロープが立腹した点は、ヘミングウェイが彼の経歴や家族などの個人的な事柄を利用したことであり、しかも不正確か誇張して利用したことであり、とロープは語っていた (Brian 56)。

#### Works Cited

- 1 Baker, Carlos. *Ernest Hemingway : A Life Story*. New York : Charles Scribner's Sons, 1969.
- 2 Brian, Denis. *The True Gen : In Intimate Portrait of Hemingway by Those Who Knew Him*. New York : Grove Press, 1988.
- 3 Griffin, Peter. *Less Than A Treason : Hemingway in Paris*. New York : Oxford University Press, 1990.
- 4 Hemingway, Ernest. *The Sun Also Rises*. New York : Charles Scribner's Sons, 1926.
- 5 Kennedy, J. Gerald and Jackson R. Bryer. *French Connections : Hemingway and Fitzgerald*. London : Macmillan, 1998.
- 6 Leff, Leonard J. *Hemingway and His Conspirators*. Lanham, Maryland : Rowman & Littlefield Publishers, 1997.
- 7 Lynn, Kenneth S. *Hemingway*. Cambridge, Massachusetts : Harvard University Press, 1987.
- 8 Mellow, James R. *Hemingway : A Life Without Consequences*. Reading, Massachusetts : Addison-Wesley Publishing Company, 1994.
- 9 Meyers, Jeffrey. *Hemingway : A Biography*. New York : Harper & Row, Publishers, 1985.